

大学生を対象としたリズムによる即興音楽作り体験後の意識調査 —障害児と健常児が共に学び合うインクルーシブ保育・教育を目指して—

狩谷 美穂*

Survey Research on the Reactions of University Students who Experienced
Improvisational Rhythmical Music-making
—Developing a Way of Using Music for Inclusive Early Childhood Education—

Miho KARIYA

The number of children with developmental disorders are growing rapidly in Japan, and the need for practical ways to educate children with and without handicaps in the same classroom setting is one of the most crucial aspects in the field of education. This paper introduces improvisational music-making as a way of incorporating children with different needs together to learn from each other's unique qualities. University students who are in the field of education experienced improvisational music-making, then immediately after the experience, they answered a number of survey questions about the experience. The survey was collected from 34 students. Their responses were analyzed by counting the number of words which were used the most in the survey. As a result, a majority of the students noted that the drumming experience was “fun”, “free” and “expressive” and they were in favor of experiencing it again. The students accepted uniqueness and differences in each other's musical expressions, and also realized improvisational music-making itself can be utilized in the inclusive education and child-care setting where handicapped children could and non-handicapped children learn together.

キーワード：障害児理解 understanding children with disabilities、即興音楽 improvisational music、インクルーシブ保育 inclusive child-care

1. はじめに

我が国で、発達障害者支援法が制定されて、早くも10年以上が経過した。既存の障害者福祉制度のみでは対応しきれなかった発達障害者への理解と支援が以前と比べ随分と進み、長年にわたり取

りのこされていた発達障害者の定義を確立し、福祉の援助の道が開かれ始めたと言える。障害児の保育・教育についても、児童福祉法により、発達障害児の健全な発達が他の児童と共に生活する事を通じて図られるよう推奨され、障害児と健常児が共に学び合ういわゆるインクルーシブな実践論が求められている。平成18年に国連総会で採択された共生社会に対する取り組みは、「障害のある者となない者が共に学ぶことを通して、共生社会の

* 広島文化学園大学大学院 教育学研究科
Hiroshima Bunka Gakuen University
Graduate Course in Educational Studies

実現に貢献しよう」とあるように、特別支援が必要な児童と通常学級に通う児童が交流し、共に学べる機会を設けることが我が国でも推奨されている。

障害児と健常児が共に学び合うことが出来る、いわゆる「インクルーシブ＝包括的」な保育・教育の具体的な方策が求められている中、論者は呉市子育て支援プログラムの一環として平成25年8月に「アートであそぼう－障害児を理解するために－」と題したワークショップ及びアンケート調査を実施した。現役の保育士及び幼稚園教諭15名を対象とした障害児理解とインクルーシブ保育・教育の可能性を探ることを目的としたワークショップを行い、アンケート調査を実施した。平成25年のワークショップでは、1)「触覚・聴覚・味覚の発見」2)「自由な音の発見」3)「触る絵本と音づくり」4)「振り返り」の4つのステージに分け体験的な学習を行った。ワークショップ内容とアンケート調査結果の詳細は、「広島文化学園子ども子育て支援研究センター年報第3号」を参照されたい。

ワークショップに参加した保育士・幼稚園教諭からは、障害児の「ちょっと変わった行動」に対しての具体的な対応策、または「一人一人の個性を大切に活かせる自由な活動の方法が知りたい」という声が多く聞かれた。論者は、音楽療法からヒントを得たヒューマニスティックアプローチを基盤とした音楽活動を主として担当し、自由度の高い即興的な音楽作りの方法を用いることで、「ちょっと変わった表現」をむしろ「個性的で素敵な表現」として活かす視点をもつ方法を提案し体験を通じた実践指導を行った。

芸術表現活動をインクルーシブ保育・教育に活かすためのプログラム構築を最終目標とした総合的な研究を前に、今回のアンケート調査を予備調査として行った。

本調査の目的は、①即興的リズム音楽作り体験についての大学生の意識調査、②即興的リズム音楽作り参加後の主観的な気分変化を明確にする、③即興的リズム音楽作りのような活動を保育や教育へ取り入れる事についての大学生の意見調査を行う事で、今後実施予定の保育・幼児教育現場での実践のヒントとする。

2. 音楽療法的視点とドラムサークル

本研究で実施した即興的リズム音楽作りワークショップのプログラムは、ヒューマニスティックアプローチをベースにした音楽療法の理論をヒントにデザインしている。発達障害児が抱える主な機能障害の一つにコミュニケーション能力の欠損と社会的スキルの極端な制限と欠損がある。これらの障害は、感情面と深く関係しており、感情面が安定する事で改善が見られるケースが多く報告されている。音楽はコミュニケーションスキルに欠損がある人々の表現を助ける働きがある。また、音楽は発達に障害のある人々の積極性を高めることができ、通常困難だと思われる活動への参加を可能にし、社会的経験の機会を与える事が出来る。このように、療法的な音楽活動に参加する事によって生じる団結と統一は、グループ全体を活気づかせ、障害のある人々が感じる孤独感の軽減につながる。音楽は、秩序を育て、自覚的な経験を助長することから、障害児が健常児と共に自由度の高いグループ音楽作りを行い、共同体験することで起こりうる統合プロセスと個々へのメリットは多いと思われる。これらのヒューマニスティックアプローチの音楽療法原理をベースにした、「一人ひとりの個性的な表現が可能でありながら、一体感も得られる活動」として、ドラムサークルと呼ばれる手法を本ワークショップで採用した。ドラムサークルとは参加者が全員で即興的に作り上げる打楽器ゲームとアンサンブルであり、ファシリテーターのガイドで、参加者の意識レベルを上げ、他者意識を育て、音楽的満足感や達成感を得る能動的音楽活動である。ドラムサークルは音楽経験も、練習も必要ない全員参加型の即興的な音楽活動である。

本調査ではドラムサークル未経験者である大学生34名を対象に、ドラムサークルを体験させ、率直な感想を調査すると共に、音を介して起こるコミュニケーションの可能性を考えて回答してもらうことにした。

3. 実践内容

平成26年に広島文化学園大学学芸学部子ども学科の学生34名を対象とした体験授業を実施した。

所用時間は90分間、内容はドラムサークル体験を主とし、概論的な説明資料をアンケート終了後に配布した。34名の学生は会場となる教室サイズの都合上2つのグループに分けられ、前半・後半グループ共に17名ずつの参加であった。どの学生も遅刻、早退することなく90分間参加し、終了後のアンケートに答えている。

体験授業開始前の休憩時間に数名の学生が楽器運搬を手伝い、教室内に人数分の椅子を円状に設置し、椅子上に予め楽器を設置した。使用した楽器は、トゥバーノ、ジャンベ、バヒーア、フレームドラム、パドルドラム、サウンドシェイプ、マラカス、シェイカー、アゴゴベル、クラベス、ウッドブロック、カエルギロ、フィンガーシンバル、レインスティック、ハピドラムである。授業開始時間に学生は自分の気に入った楽器を選び着席した。

論者はファシリテーターとして、グループの意識を高めるために、楽器別、セクション別、リズム的なコネクション、音量などの音楽的ダイナミクス要素を演奏を通して参加者が自然に体験、理解するようファシリテートした。全体的なドラミングの枠を体験した後は、それぞれの担当する楽器の特徴や個性を聞き合い、コール&レスポンスでの演奏、楽器別の音色を聞くことで大音量では聞こえなかったであろう小物楽器の繊細な音を聞くように介入を行いグループ意識を高めるよう促した。90分の体験授業終了直後に、アンケートを配布して記入している。

4. アンケート調査

アンケートでは、性別、年齢のみを記入させ、より自由で率直な感想を得るために、氏名は記入させていない。参加学生34名の性別は女性23名、男性11名で平均年齢は21歳である。時間の都合上アンケートの質問項目は、5項目にしぼり、回答所用時間は10分程度、回答率は100パーセントである。

アンケートの目的は、①即興的リズム音楽作り体験についての大学生の意識調査、②即興的リズム音楽作り参加後の主観的な気分変化を明確にする、③即興的リズム音楽作りのような活動を保育や教育へ取り入れる事についての大学生の意見調

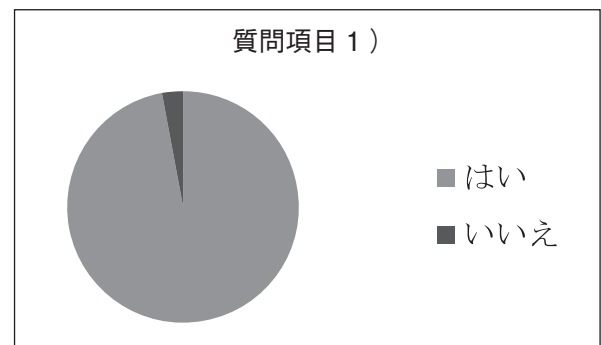
査である。

アンケート項目は、1)『ドラムサークルを体験する前と今の気分は変わっていますか?』の質問に対しては『はい』『いいえ』のどちらかを選択するよう求めた。次に、『はいと答えた方はどのように変わっていますか?』の質問に対しては、『良くなった』『悪くなった』からどちらかを選択するよう求めた。2)『今日体験したことから何を学びましたか?』3)『保育や教育にドラムサークルを取り入れることについてどう考えますか?』4)『この活動で感じたことで、明日もまた感じたいと思うことをあげてください』5)『ドラムサークルを経験しての感想を教えてください』の項目では、自由記述での回答を求めた。

5. アンケート結果

参加者34名を対象として行ったアンケート調査では次のような結果を得た。

質問項目1)の『ドラムサークルを体験する前と今の気分は変わっていますか?』に対する回答に『はい』と答えた学生が33名、『いいえ』と答えた学生が1名。『はいと答えた方はどのように変わっていますか?』に対しては、33名全員が『良くなった』と答えている。

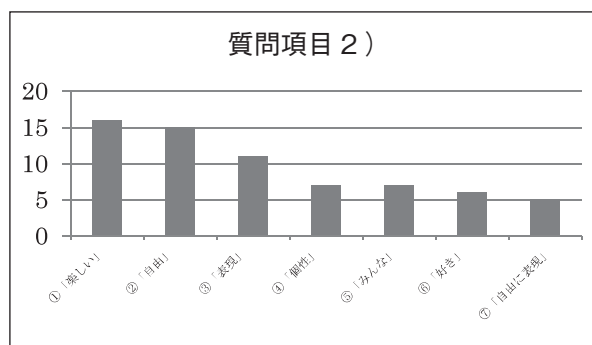


この結果からも分かるように、ドラムサークル体験前後の気分はほとんどの参加者において改善している事が明確になった。アンケート結果全体を通して見ても、本体験に対してほぼ肯定的な意見で占められており、否定的な意見はなかった。

質問項目2)以降の自由記述質問に対する回答で得られた感想は、単語の使用頻度の高い順に7つの単語をキーワードとして選択し、質問項目ごとに使用頻度をカウントすることで、自由記述回答中の最も多く出された意見と感想をまとめた。

使用頻度の高かったキーワードは、①「楽し（い）」②「自由」③「表現」④「個性」⑤「みんな」⑥「好き」⑦「自由に表現」の7つである。

質問項目2)の『今日体験したことから何を学びましたか?』の回答内のキーワードの使用回数は、①「楽し（い）」が16回、②「自由」が15回、③「表現」が11回、④「個性」が7回、⑤「みんな」が7回、⑥「好き」が6回、⑦「自由に表現」が5回である。「楽しい」という言葉を使った回答が一番多いが大差なく「自由」が15回使用されている。参加者は「自由に音楽を作ることの楽しさ」を学びとして捉えたことが伺える。また、「自由に表現する」ことが新たな学びであることを表した感想が多く見られた。



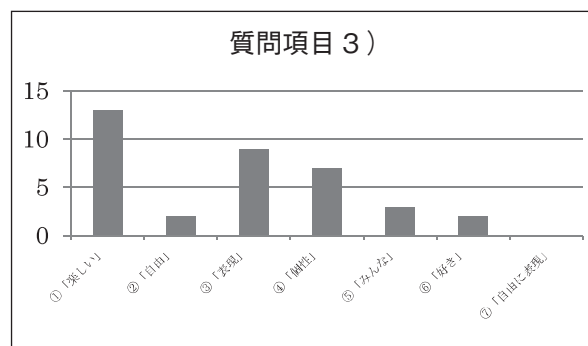
自由記述回答の一部

- 素材や叩き方によって色々な雰囲気になる。
- 全員でやったり、一人でやったりして様々な表現をみんなで共有できると楽しい。
- 即興的な音楽を表現することで、本当の意味での「自由に表現する」ということを学んだ。
- 決まったことがないので個性がでて、いいなと思いました。
- 自由に表現できてみんなの個性が出てくる。
- 音楽はもっと自由に作っていいのだと感ずることができました。それによって視野を広げてピアノにも取り組むという姿勢を学ぶことができた。
- 楽譜にとらわれるのではなく、自由に演奏する楽しさ。音の重なり。
- 細かい決まりがない自由度の高い音楽の楽しさを学んだ。
- 自分なりに表現した音でも、みんなと合わせると一つの音楽になるということ。
- いろんな音があり、全員でならずとそれぞれ

響くとわかった。

- 自由と自分勝手な音楽は違うということ。
- 周りにたくさんの人、音があることに気づけた。
- 楽譜が苦手な人でも音楽が好きになれると思った。
- 自由に表現できるから、皆が楽しめる。
- 即興で音楽が作れるということ。

質問項目3)の「保育や教育にドラムサークルを取り入れることに関してどう考えますか?」の質問に関しては、すべての回答者が保育や教育にドラムサークルを取り入れることについて「良い」と肯定的な意見が述べられている。自由記述欄でのキーワード使用回数は、①「楽し（い）」が13回、②「自由」が2回、③「表現」が9回、④「個性」が7回、⑤「みんな」が3回、⑥「好き」が2回、⑦「自由に表現」が0回であり、質問項目3)においても、「楽しい」という理由で保育や教育に取り入れることに対して賛成意見であることが分かる。また、「表現」が9回と頻繁に使用されている事からも、保育や教育における「表現」の重要性を本活動から感じての回答が多く見られた。



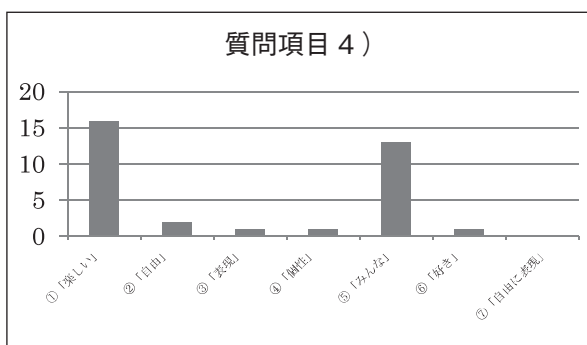
自由記述回答の一部

- 集団に入ることが難しい子どもにとっては、とても良い教育活動だと思う。
- 友達の個性や良いところを見つける利点もある。
- 子どもの好きなように表現でき、幅広い年齢の人が楽しめる。
- このような活動で、子供がより音楽に親しみを持つと思う。
- 子供達にとってストレスの多い社会になってきているので、良い発散になる。
- 子供達も楽しみながら活動することができ

る。

- 子供の個性をしりつつ、気になる子への指導ができそう。
- 表現力や協調性などに良い影響が見られると思う。
- 楽しみながら自己表現ができるので良いと思う。
- 一人一人の個性も知ることが出来て、何より楽しい活動。
- 全員で作り上げる楽しさを知ることにも出来る。
- 自己表現のきっかけになり、人の気持ちを考えることができるようになると思う。
- リズム感、聴覚、視覚の発達にも良いと思う。
- それぞれが個性を出すことができ、皆で楽しむことができる。
- 楽譜があるわけではないので、優劣もない。
- 子供一人一人の好きなリズムで叩くことができるので、楽しめる。
- 子供の表現が豊かになるし、自分でリズムを考えることで考える力もつく。
- もっとこのような音楽活動が増えると良い。
- 「表現方法」「全員で」「自由に」などから学ぶことは多い。
- 子供は誰かのまねをする子が多く、自由に表現することが苦手な子が多いので、取り入れて自分が出せる場が出来れば良いと思った。
- 必ず皆が楽しめるし、コミュニケーションの一つの方法でもあり自分を出す方法でもある。
- 将来の小学校教育に取り入れたい。

質問項目4)は「この活動で感じたことで、明日もまた感じたいと思うことをあげてください」として、本活動で得た感覚で、今後も継続したいと思うことを訪ねた。結果は、①「楽し(い)」が16回、②「自由」が2回、③「表現」が1回、

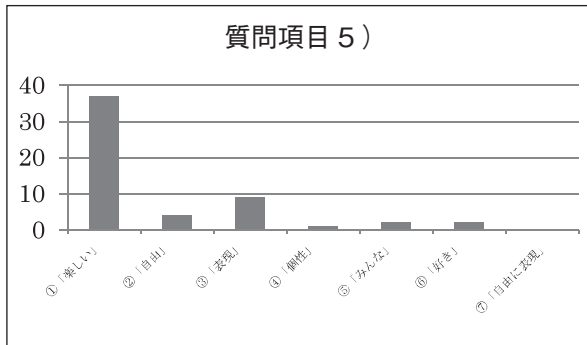


④「個性」が2回、⑤「みんな」が13回、⑥「好き」が1回、⑦「自由に表現」が0回で、やはり「楽しい」がキーワードの中では最多であり、続いて「みんな」が多く使われている。これは、自由に集団で楽しむ共同体験から得た新しい経験と感覚を今後継続したいという意識の現れであると考えられる。

自由記述回答の一部

- 色々な人と楽しい雰囲気でご過ごす。
- 皆が笑顔で楽しむこと。
- 皆が様々な個性を持っていることが素晴らしいということ。
- 自然と笑顔になることが多かったので、その部分は毎日でも感じたい。
- 一人一人の色を持った音楽。
- 楽しく音楽ができ、皆が平等にできる素晴らしいと感じた。
- 最初自由にすることで、興味がどんどんわいてくる。
- いつも笑顔でみんなと楽しくいたい。
- 音楽活動で汗をかくのも気持ちがよくて新鮮さを感じた。
- 自分が今音楽を作っているということ。
- すっきりとした爽快感。
- みんな違ってみんないいのだと感じて、人間関係を作っていきたい。
- 皆で一つの物を作ること
- 高揚感。
- 恥ずかしがらず楽しむことで一人一人の個性を認め合うこと。
- 自由に自分を表現すること。
- 皆で一つになって一つの物を作り上げる達成感。

質問項目5)は「ドラムサークルを体験しての感想を自由に書いてください」として、個人の感じた感想を自由に述べるよう求めた。キーワードの使用回数は、①「楽し(い)」が37回、②「自由」が4回、③「表現」が9回、④「個性」が1回、⑤「みんな」が2回、⑥「好き」が2回、⑦「自由に表現」が0回で、「楽しい」が37回と多数となっている。本質問に対する自由記述の文章量は4つの自由記述質問項目の中で最多だった。



ここでも、本ワークショップから得られた体験が参加者にとって「楽しい」体験であったことが読み取れる。また、多くの参加者が「恥ずかしさ」や「照れ」のようなものを感じたと答えていることは、自由度のきわめて高い新たな音楽作り体験に対する不安と緊張の表れであることが伺える。

自由記述回答の一部

- 自分なりに考えて演奏するのは恥ずかしかったけど、自分の思うように叩けることが楽しかった。
- 私は吹奏楽部でパーカッションをしていたのですが、カエルの鳴き声の楽器や知らない楽器に触れることができて楽しかったです。
- 思い切りドラムをたたいたり、大きな声を出したりととてもすっきりした気分になりました。
- 決まった音楽ではなく、全員が好きなように出した音なのにとってもきれいな音楽になっていることにびっくりした。
- 最初は照れくさいけど、だんだん表現する楽しさを味わうことができました。
- 思っていたことと違っていた。最初は恥ずかしいという気持ちもあったが、やっていくうちに皆も笑顔が増えていったと思う。楽器も「こんな楽器があるんだ!」というもののばかりでした。皆で合奏できてとても楽しかった。
- 表現をできる場があるのはいいなと思った。
- 叩いてストレス発散してすがすがしい気持ちになった。それと軽いコミュニケーションのようなことができていたので、太鼓だけでも気持ちを表すことが出来るのだと思った。
- とても楽しかったです。太鼓にも色んな音があって、叩き方や太鼓の種類によって違ったので面白かった。

- 初めて見る楽器もいくつかあり聞いていても楽しい気分になりました。皆で音をそろえたときは気持ちよかったです。
- 1つの太鼓から色々な音が出てくことや、ちょっと音色が違った物が入ると音楽の雰囲気がかわったりするところなど新しく知ることが出来て楽しかった。
- ただ叩くというのではなく、皆で一つの音楽を作り上げていくという面で楽しむことができた。楽譜がない分音楽に苦手意識がある人でも楽しむことが出来ると思う。
- 例えば文化の違いで言葉が理解できない、話すことが出来ない場合のコミュニケーションツールになるのではないかと思った。
- 思っていた以上に汗をかいた。身体を動かして、表現することはとても楽しい物だと分かった。良い経験ができた。
- 自分をリズムで表現することの楽しさやストレス発散、ほかにも他人のリズムをよく気にしながら相手のことを考えながら音楽ができた。
- 「音楽は経験していないと難しくてできない」というイメージだったが、自由に楽しく皆ですることは面白い。ドラムサークルで音を楽しむことこそが音楽だと改めて思った。
- とても楽しい時間でした。皆自由に失敗するという不安もなく、笑顔で演奏していて本当に楽しめました。
- 決められた方法がなく、最初は戸惑ったが、楽器の音を出していくうちに楽しくなり、自由に表現することができた。
- 正解も間違いもない感じで、とても気楽に楽しくやることが出来た。
- 楽しみながら心地よい疲れを感じた。私は音楽が苦手なので、何をしても失敗にならないということが楽しく出来たと思う。また、皆の顔や音、雰囲気を和になって感じられるので、面白く楽しい空間だと思った。
- 先生のファシリテートが音楽を楽しくしていると感じた。私も出来るようになりたいと思う。自分一人で演奏する所はドキドキし、一定のリズムを保つことの難しさを実感した。

6. おわりに

幼児期の子供は空き箱や机などを叩き、その音色やリズムを楽しむ。太鼓を与えれば叩き、リズムカルに身体を揺らす。本来人間が楽譜を読み、それを基に音楽を演奏するようになるのは、自由に音楽を楽しめる幼児期のずっと先のことである。それは、子供の言語の発達段階とよく似ており、通常子供は文字を読み書きする前から言葉を使いこなし、大人や周りの子供達とコミュニケーションをとる。幼児期の子供たちにとって即興的な音楽作りはごく自然に行う活動であるのに対し、音楽教育で評価を受け続けた大学生は「決まりのない、先が見えない即興音楽作り」に対し不安と緊張を覚える。決まった歌やメロディーがなく、即興性の高いドラムサークルでは、発達段階を問わず、そのシンプルさゆえに楽しみながらお互いの違いを認め合い、グループへの参加が可能である。ファシリテーターの介入によって、意識していなかった他者の音に気づき、即興的に互いの音に反応し合うこと、すなわち音楽的対話が頻繁に生まれることになる。

インクルーシブ保育・教育を実践に活かすメリットは、障害児や「ちょっと違う子供」と健常児がクラスの中で互いの違いを認めあい、共存し、互いの個性から学び合うことであろう。既成の音楽を用いると、どうしても「うまく出来ない」「ほかの子供と同じようにできない」事になるケースが多く、子供にとっても、指導する教員にとっても困難が生じる。しかし、即興のリズム音楽作り活動を通して、子供達はどう反応するのであるか。本調査は、今後行う予定の保育現場でのワークショップ実践に向けての予備調査として教育者を対象とする大学生を対象にアンケート調査を行った。

本アンケート調査結果で最大数だった反応「楽しい」について考えてみる。幼児期の音楽は、「楽しい活動」である事を前提に、歌や踊りを通して幼児は表現力を育むが、成長段階によって音楽が「楽しい」活動から「評価される」活動に変わる時期がくる。健常児と同じように出来ない子どもたちはその評価基準から脱落してしまうだろう。今回のアンケート調査で頻繁に使用されていたキーワードから見る「楽しく、自由に表現できる

活動」というのは、現代の大学生にとって馴染みの薄い活動であることが伺える。これは、学生達自身が楽しみながら自由に自己を表現する機会が少ないということであり、彼らが教育者になり障害児を含む子ども達の指導を行う上で問題や躓きになりかねない。

ドラムサークルファシリテーターがよく使う言葉に、「お好きにどうぞ」があるが、本調査の実践中にも見られたように「好きに演奏する」ということ自体、何をすべきか分からない様子で回りの参加者の様子をきょろきょろと観察する学生が多かった。予想以上に学生達が即興的な演奏に対する抵抗と、驚き、そして新鮮さを感じていたと言える。

平成25年の保育士・幼稚園教諭を対象としたワークショップ、「アートであそぼうー障害児を理解するためにー」終了後のアンケート調査で、即興のリズム音楽作り体験について、教員の立場より率直な感想を自由記述フォーマットで得ることができている。参加者の多くは即興のリズム音楽作り体験について、そのシンプルさと楽しさに驚き、リズムによるコミュニケーション力と保育実践への可能性について肯定的な感想を述べている。また、現在多くの保育士・幼稚園教諭が、「発達に遅れや問題のある少し変わった子供についての日常的なアプローチ方法」について悩み、解決案を求めている。保育・教育現場では、障害児をどのように活動に巻き込み、彼らの個性を無理のない範囲で生かしきるかを常に模索中である。

即興的なリズム音楽作り体験は、「Recreational Music Making」と呼ばれ、米国を中心に成人の健康維持やウェルネスの促進、企業等のチームビルディングや学校教育、そして家族、コミュニティ内の絆作りの新たな可能性を持つ音楽活動として注目され、実践的な研究も進められている。今後は、即興のリズム音楽作りの持つ社会性、自己表現性に着目し、保育所・幼稚園及び小学校での活動導入のメリットとリスクを検討したい。

最後にドラムサークルの父と呼ばれ、リズムを用いた活動を初案実践するパイオニアの一人であるArthur Hullによると、ドラムサークルには、ファシリテーターと参加者がそれぞれ経験する意識レベルの成長ステージがある。参加者は、「個人」として珍しい楽器をただ嬉しくて触っているとい

う過程から、「グループ意識」を発展させるステージへ、そして周りの音に気づくことで、「パーカッション・アンサンブル」を作り上げる段階で、最後には参加者全員がお互いの存在を認め合い、一人一人の役割を尊重し、響き合う「オーケストラ」の段階へと進む。これは、まさに人間社会における理想的な集団における相互関係ではなかろうか。子供達が「自分だけ」の意識から「グループ全体」へ意識を広げることで、自己及び仲間の役割に気付くことが出来る。発達障害児や周りの「ちょっと違う子」の発する音と存在感に子どもたちが気付き、また発達障害児は全体の音と自らの音の関係性に気付くことが可能になる。これらの気付きを得るためには、ファシリテーターの優れた感性と技術が重要であることは言うまでもない。

次にファシリテーターの段階的変容をこう表している。最初の段階は、「独裁者」として参加者全体に対して自分の存在と役割を示すことで、その後のルールを参加者に示す。次の段階は、「ディレクター」として、シンプルな介入を行い、参加者が周りの音、存在、役割に気づくよう促す。次に「ファシリテーター」として、周りに気づき始めた参加者同士がさらにお互いの存在と音に敏感に反応し合うよう介入を行う。最後に、「オーケストラの指揮者」として、楽器一つ一つの音が響き合い美しいオーケストレーションを作り上げるよう介入を加える段階である。こうしてファシリテーターと参加者が徐々に理解し合い、成長し合うというステージがドラムサークルの魅力であろう。

本調査では、授業時間の都合上90分の活動となっているため、その成長度合いには限りがあったものの、参加学生達が自由に自己流の音楽表現を行い、それぞれの個性を感じ取り、仲間達の意外な一面を認め合う結果、一体となれたことは有

意義であり、新たな可能性の発見だったのではないだろうか。今後は保育現場での実践と調査を行い、即興音楽活動の持つ可能性についてさらなる研究を進めたい。

参考文献

1. 小笠原文・狩谷美穂 「アートであそぼう！－障害児を理解する為に－呉市子育て支援プログラムにおける実践からの考察」広島文化学園子ども・子育て支援研究センター年報第3号2013
2. 狩谷美穂「コミュニティー音楽療法の一環としてのドラムサークル実践の可能性－音楽で地域社会をつなぐために－」広島文化学園大学学芸学部紀要創刊号 2011
3. 厚生労働省HP軽度発達障害児に対する気づきと支援のマニュアル
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/boshi-hoken07/h07-02a.html>
4. Christine Stevens 「アート・アンドハード・オブドラムサークル」株式会社エー・ティー・エヌ 2004
5. E. H. ボクシル「実践・発達障害児のための音楽療法」株式会社 人間と歴史社 2003
6. ポール・ノードフ&クライヴ・ロビンズ「障害児におけるグループ音楽療法」株式会社 人間と歴史社 1998
7. Renee Mungas, Michael J. Silverman “Immediate effects of group-based wellness drumming on affective states in university students.” (2014) The Arts in Psychotherapy. 41, 287-292
8. Arthur Hull & Nellie Hill 「ドラムサークル・ファシリテーターズ・ハンドブック日本語版」OrangeBoomBoom 松山 2014